

20年前から入居を決めていました

京都〈ゆうゆうの里〉 二本垣 まち子様(84歳)平成27年入居時一人入居

病児保育室を開き、社会貢献

〈ゆうゆうの里〉に入る直前まで、小児科医として58年間働いていました。夫も同じく医師で産婦人科医。二人で富山県・黒部市に開業しました。でも、開業5年



医院時代、職場の仲間と(前列中央が二本垣様)

で夫は病に倒れてしまつて。一人娘が小学4年生の時でした。

夫の発病から7年間、亡くなるまでの間は看病と子育て、仕事の3つをこなす日々でした。

その後、平成14年(2002年)に医院のすぐ目の前の土地を買取り、長年の夢だった病児保育室を開きました。私も働く母だったので、仕事を持つお母さんの気持ちにはよくわかります。彼女たちが安心して子供を預けて働ける環境が必要だと思いました。

黒部市では当時まだこうした施設はありませんでしたから、お母さんたちの役に立てたのだと少しよかったなと思います。

訪問者が非日常を味わえる京都

〈ゆうゆうの里〉に入ることは、入居する20年前から決めていました。京都に施設ができることを新

聞広告を見て知ったのがきっかけです。

娘に頼ることは考えていませんでした。娘にも「医院をやめたら京都に行く」と言い続けていました。そのせいか娘も「京都に行くんでしょ?」と承知していました。地元ではなく京都にしたのは、

夫が大阪府・枚方市の病院に勤務していたことがあったり、京阪地区にはなじみがあったから。

〈ゆうゆうの里〉を訪ねて来る知人の多くは、京都というと非日常を味わえるようですね。私を訪ねるついでに京都観光をよくしています。地元の黒部では、まだ〈ゆうゆうの里〉のような施設が珍しいのか、施設の見学ついでに訪ねてくる人も多いですよ。

料理道具をたくさん持参でも必要なし

ここでの生活には、満足してい



ます。料理が好きなので、入居したら色々作ろうと専用の冷凍庫や道具をたくさん持ってきました。でも、全部返してしまいました。ここのご飯は美味しいので、自分で作るのには逆に面倒になってしまったんですね。

食事以外にも、先日、骨折した際にも自分で色々とできないところをケアしてくださり、助かっています。今の生活で楽しみみという、俳句サークル。気の合うお友達ができ、彼女たちのおしゃべりを楽しんでいます。